

## 手拍子によるリズム反応を高める自作曲

齋藤 一 雄\*

### 1 ねらい

知的障害の養護学校小学部低学年では、お気に入りの曲をくり返し聞いて楽しむ児童はいるが、音楽への興味・関心はせまく、集中して活動する時間も少ない。音楽遊びの段階だが、音楽への反応や楽器による表現の幅を広げることが必要な児童である。

そこで、音楽を聴いて身体を動かす、手拍子をするなどの活動を楽しむことができるように、興味・関心を高めることができそうな歌詞とメロディ、リズムなどが感じとれる曲を自作することにした。

自作にあたっては、歌詞と動作が一致している、擬音などがある、手拍子等で合わせる活動がしやすい、リズムパターンやフレーズがわかりやすく、手拍子する部分がとらえやすく、できるだけ短い曲とすることを考えた。

自作の曲には、様々なリズムパターンを組み込むことができる。ここでは、低学年の児童の実態を考慮して、タイミングを合わせて手拍子する、速いテンポで手拍子し続ける、四分音と四分休符の組み合わせによるリズムパターンをとりあげることにした。

### 2 「手と手をパッチン」

自作曲「手と手をパッチン」は、4/4拍子4小節の短い曲である(楽譜1)。齋藤(2003)の教科書の教材分析から、おんがく☆とおんがく☆☆においては8小節前後の曲が多く掲載され、児童の発達段階にみあった選曲がなされていると指摘されている。同期が可能になりそうな段階の児童には長すぎない小節数として、8小節よりも短い4小節を選んだ。また、歌詞と動作のイメージが重なるようにするとともに、動作の準備の間を用意し、さらに、児童が思わずやってしまうような16分音による細かく速い動作をひきだすようにした。

### 3 「たいこをドン」

自作曲「たいこをドン」も、4/4拍子4小節の短い曲とした(楽譜2)。基本的には「てとてをパッチン」と同様な考え方で作曲したが、授業の最後に展開する「大きなたいこ」につなげる題材で、リズムパターンも「大きなたいこ」で使われている四分音と四分休符による組み合わせに注目して合わせることを課題とした。

### 4 指導上の留意点

各曲とも指導者が児童の前で見本を示すことと複数の指導者で個々の児童の支援を行うことが必要である。個々の児童への支援は、一緒に活動して見本を示す、児童の片手を取って指導者の片手と合わせる、児童の両手を教員が取って合わせるの3種類である。児童の反応の状況を受けて、自ら取り組まない状況がみえたならば、片手で合わせる支援、両手を持って合わせる支援に切り替え、さらに直接的な支援をなくし、自発で合わせるができるかどうかみるようにする。

始める前には、「手を準備して」と声をかけ、準備と集中を促すようにすることが重要である。そして、指導者も歌いながら、一生懸命手拍子することも重要である。終わったならば、「パッチンがあっていたね」「ドンがびったりだったよ」「手拍子がいっぱい速くできたね」などと形成的な評価をすることが重要である。

\* 上越教育大学障害児教育講座

楽譜1 自作曲「手と手をパッチン」(齋藤一雄 作詞・作曲 齋藤加代子編曲)

手と手をパッチン 手と手をパッチン ソーレ ソーレ パチパチパチパチパチパチパチパチ

楽譜2 自作曲「たいこをドン」(齋藤一雄 作詞・作曲 齋藤加代子編曲)

たいこを ドン たいこを ドン ドン ドン ドンドンドン

## 5 指導の効果

自作曲で用いた歌詞に合わせてタイミングをとって手をたたく活動は、リズム反応への興味関心を高め、自発的な取り組みをひきだすことがみられた。2曲とも4小節の短い曲にしたことも、集中がとぎれずに取り組むことができた要因の一つといってもよい。しかし、「手と手をパッチン」のように動作を積極的にひきだすような曲と、「たいこをドン」のような静的な曲想でリズムパターンに合わせる曲では違いがみられた。特に、後半の四分音と四分休符を組み合わせたリズムパターンを含む反応については、同期できた割合が20~22%と少なくなり、合わせることができない児童もいた。

また、「手と手をパッチン」の前奏は1小節とし、曲が始まったということと、続いてすぐに動作に入るような流れにしたことも、積極的に反応をひきだすことにつながったのではないかと考える。「たいこをドン」の前奏は、後半のリズムパターンをそのまま利用し、一度リズムパターンを示してから、正確な反応をひきだそうと設定したが、その曲想に合わせたような消極的な反応になってしまった。前奏の付け方と全体の曲想による影響が大きいものであることが示唆された。

16分音14拍と八分音1拍を聞いてより速く手拍子する課題については、時間になると1秒弱であるので、やっとたたき続けることができるようになった段階と考えることができる。特に「そーれそーれ」というかけ声もあったので、連続手拍子に意欲的に取り組んでいたのではないかと考える。

そのような点で、「たいこを」「手と手を」など準備をして手拍子する課題はわかりやすく取り組みやすかったといえる。準備なしにリズムパターンだけに手拍子する課題では、リズムパターンの理解と2小節分の先の見通しが必要で、そのために同期できた割合が少なくなった部分もあった。

子どもによっては、そばで(手と手を)「パン」、(それぞれ)「パンパンパン・・・」と言うと、たたいた児童もいたので、さらに回数を重ねると、だいぶできてくるのではないかと考える。

## 引用文献

齋藤(2003) 養護学校小学部用音楽科教科書の分析。学校音楽教育研究, 第7巻, pp.189-193